神奈川歯科大学短期大学部紀要，1，13－17，2014

老年看護学看護過程演習の報告
―模擬患者を活用した授業による気付きと課題―

Report on the nursing process practice of the old age nursing science
―It is a problem with having noticed through the practice by the sham patient―

石川 智子　山田 ノリ子
Tomoko ISHIKAWA，Noriko YAMADA
（神奈川歯科大学短期大学部　看護学科）

キーワード：高齢者　看護過程　模擬患者　学習効果

はじめに

看護学科二年次の「老年臨床看護」では、講義時間の約３分の１を看護過程の演習としている。看護過程は「情報収集・アセスメント・計画立案・実施評価」からなる。多くの場合「実施評価」は臨地実習で学ばせ、学内の演習では行わない領域が多い。臨地実習で患者を受け持ち、計画を立て実施し評価するという方法をとっている。つまり、臨地実習で看護過程の学習が完結することになる。

看護過程は患者をより良い状態にすることを目的とした看護技術であり、目的達成できたか否かの評価は実施した結果をもとに判断する。援助に対する受け持ち患者の反応は、実施した援助が患者にとって適切な援助か否かを判断する手がかりとなる。即ち、演習の中で学生自身が立案した看護計画をもとに援助を実施したことに対して患者の状態や状況に合わせた内容であるかどうかを評価することは、看護過程の習得のための大切な要素となる。

入院患者の多くを高齢者が占めているが、高齢者は学生の援助に対して、「孫みたいに可愛い」、「ありがとう」と言うことがほとんどで、学生の援助が不愉快であっても学生に対する遠慮からほとんど苦情を訴えない。或いは訴えようとしても、意思を全く伝えることができない状態に陥っていることが多い。学生にとって、援助が適切だったかどうかを正確に判断できないことが多くなっている。そのため、患者の状態に合わせた援助であるかどうかを的確に伝えられる患者役が必要となる。

従来は学生が患者役となって演習していたが、この場合、患者役の学生が患者の気持ちを考えられないことや、看護師役の学生に対する遠慮から、感じたことを直接伝えないことが多々あり、患者の反応や状態から評価することが困難となる。このようなことから、事例を用いた一連の看護過程における援助場面に模擬患者を活用した授業に取り組んだ。

模擬患者とは、患者役としての訓練を受け、学生の援助に対して長短両面を的確に説明できる人々で、その多くが高齢者である。看護教育だけでなく、医学教育にも活用されている。

学生は視覚で確認する方が納得する傾向にあることから、模擬患者に援助を実施する場面を、ビデオカメラで撮影し、この映像を見ながら援助の実施評価と目標に対する評価を行った。この演習の実際及び、学生と模擬患者の感想、今後の課題について報告する。

Ⅰ．学習計画

１．老年看護学看護過程演習の目的

高齢者に特有な症状・疾患・障害を有し、治療をうける高齢者への看護を展開する能力を習得する。

２．模擬患者活用のねらい

1）実施した援助に対して、患者として良かった悪かった等の評価をするとともに、「～して欲しかった」、「～すると良いと思う」等のアドバイスを行い、看護過程の演習を学内で完結させる。

2）模擬患者から「～は良かった」と、良い面を認めて学生に伝えることで、学生の自信を高める。

３．模擬患者との打ち合わせ

模擬患者の所属団との打ち合わせでは、事例に関する

受付日　2014年２月10日　　受理　2014年３月20日

情報を伝え、年齢・性別を考慮して、事例の患者に適したメンバーの選出を依頼した。また、演習の目的及び、事例の生活背景や疾患の状況について説明した。

模擬患者からは今回の演習の目的、場面設定、学生への接し方などの質問があり対応した。

事前に説明できない実施の場面に関しては、実際の患者になりきって対応することを依頼した。

表１　模擬患者との演習前のスケジュール

回数	調整内容
１回	SP 依頼に関すること 演習項目・時期・人数・打ち合わせ日程
２回	人数・打ち合わせ日程・演習内容（概要）に関すること
３回	具体的な演習内容に関すること
４回	打ち合わせ（ライフプランニングセンターにて）
５回	前日スケジュールの確認

Ⅱ．看護過程の演習の概要

１．演習の進め方

看護過程の実施期間は、平成25年11月19日から平成26年１月14日までの９コマのうち、演習の実施は平成26年１月７日と１月14日の２コマとした。

第１回目から第４回目は個人ワークとし、学生個々でアセスメント及び病態関連図を記録する時間とした。第５回目からは５～６名のグループとなり、看護計画を立案し、実施のための準備をする時間とした。

表２　看護過程演習授業スケジュール

回数	授業内容	授業形態
１回目	事例選択 ゴードン 11 項目に基づくアセスメント	講義 個人ワーク
２回目	↓	↓
３回目	↓	↓
４回目	病態関連図記入	↓
５回目	看護計画立案	グループワーク
６回目	模擬患者に対する援助の実施 （前半グループ）	演習（グループ）
７回目	演習後の振り返り（２年生全員）	個人ワーク
８回目	模擬患者に対する援助の実施 （後半グループ）	演習（グループ）
９回目	演習後の振り返り（２年生全員）	個人ワーク

２．演習当日のタイムスケジュール

第６回目（前半グループ）及び第８回目（後半グループ）の援助の実施は１グループ15分間とし、実施直後から15分間を、模擬患者とともに実施した援助を振り返る時間とした。

援助の実施は成人老年看護学実習室とし、模擬患者との振り返りは在宅看護実習室とした。

表３　演習当日のタイムスケジュール

時間	A教員		B教員	
	実施	模擬患者と共に評価	実施	模擬患者と共に評価
15分	1G		5G	
15分	2G	1G	6G	5G
15分	3G	2G	7G	6G
15分	4G	3G	8G	7G
15分		4G	9G	8G
				9G

Ⅲ　倫理的配慮

看護過程演習の開始前に、模擬患者に援助を実施すること、そのために実施可能な具体的な計画を立案しなければならないことを繰り返し説明し、計画の指導も実施した。また、援助を実施する場面を録画し、映像を見ながら振り返り評価することを説明し、了解を得た。模擬患者役の高齢者に対しても録画すること、その映像を２年次全員でみることを説明し、同意を得た。

模擬患者の活用に関しては、学生がよい学びができればとの考えで学校の要望を受け入れ、協力して頂いていることを説明した。また、実際に「体位変換」「食事介助」「寝衣交換」等の援助をさせて頂くことから、本当の患者さんと考え尊厳とプライバシーを守り、倫理観を持って援助するように指導した。

授業の最後に、学生に対して模擬患者を活用した演習に関するアンケートの記入を依頼した。その際、無記名とし個人が特定されないようにすること、次年度の授業改善に役立てる目的であることおよび不利益を被ることがないことを口頭で説明し、同意した場合のみ記入するように説明した。

そして、模擬患者12名に対し、振り返りの内容について個人が特定されないようにすること、データについては、責任を持って廃棄することを口頭で説明し、同意を得た。

Ⅳ　演習の結果

１．アンケートからみた学生及び模擬患者の反応

１）アンケートの回収率

対象は看護学科２年生92名中58名（回収率63%）

２）アンケートの内容

（１）看護学生に対するアンケート

アンケートは、①援助の実施を通してコミュニケーションの勉強となったか、②コミュニケーションの勉強になった理由（各３段階評定）③勉強にならなかった理由（自由記載）④援助の実施から気づいたこと（３段階評定）、⑤演習実施時の緊張感（３段階評定）、⑥緊張感の理由（３段階評定、⑦演習の必要性（３段階評定）について作成した。

表４　アンケート内容

１．模擬患者を活用した援助の実施は、コミュニケーションの勉強になりましたか。
　①勉強になった　②勉強にならなかった　③なんとも言えない
２．模擬患者を活用した援助の実施は、コミュニケーションの勉強になったと回答した方へ、その理由お尋ねします。
　①説明などする際に、どのように話すと良いか分かったから。
　②患者の気持ちを丁寧に説明してもらったから。
　③その他（　　）
３．模擬患者を活用した援助の実施は、コミュニケーションの勉強にならなかったと回答した方へお尋ねします。今後はどのようなことを追加するとよいと思いますか。（　自由回答　）
４．模擬患者に援助を実施して気づいたことについてお尋ねします。
　①実際に模擬患者に援助する前に、練習したほうがよい
　②計画はもっと具体的に立案したほうがよい
　③その他（　　）
５．自分のグループが援助する順番になってから、実施終了するまで緊張しましたか。
　①とても緊張した　②緊張したが、それほどでもなかった
　③緊張しなかった
６．緊張した方にお尋ねします。緊張した理由について教えて下さい。
　①初めてのことだったので　②自信がなかったから
　③じっと見られていたため
８．このような演習はあったほうが良いと思いますか。
　①思う　②思わない　③どちらでもよい

（２）模擬患者と教員間の振り返り

授業終了後に援助を受けたことに対する振り返りの内容とした。

３）分析方法

分析には、Microsoft Excel 2013を使用し、質問項目の百分率を求めた。また、学生がその他で回答した自由記載の内容文章の抽出と、模擬患者が振り返りで語った内容を抽出した。

４）アンケート結果

（１）コミュニケーションの勉強となったか

52名（89.7%）の学生が「勉強になった」と回答しているが、５名（8.6%）の学生が「何とも言えない」、１名（1.7%）の学生が「勉強にならなかった」と回答した。

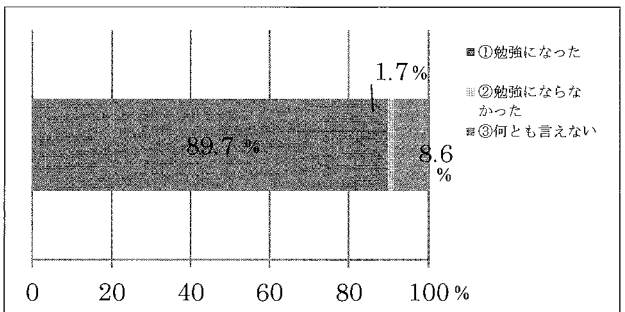

図１　コミュニケーションの勉強になった

（２）コミュニケーションの勉強となった理由

勉強になった理由として、「説明時どのように話すとよいかわかった」が36名（60%）、「（模擬患者から）患者の気持ちを丁寧に説明してもらった」が22名（36.7%）、その他が２名（3.3%）であった。その他と回答した学生は、『援助を受けてこの時にこう思った、このようにしてほしかったと気づけた』、『気づけないことも患者目線で考えることが出来た』と記述している。

一方、「勉強にならなかった」と回答した学生は、理由については無回答であった。

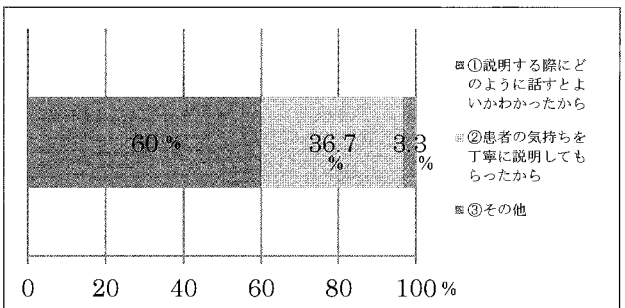

図２　コミュニケーションの勉強になった理由

（３）援助を通して気づいたこと

36名（59%）の学生が「模擬患者に援助する前に練習したほうがよい」と回答した。また、「計画はもっと具体的に立案したほうが良い」と回答した学生が21名（34.4%）であった。その他と回答した４名（6.6%）の学生は、『学生ではなく、模擬患者に援助することでよりリアルな感じだった』という記述があった。その他の自由記載では、『計画について改善点を事前に教えてほしい』や『雰囲気や模擬患者を活用する様子を詳しく説明してほしい』という要望が記述されていた。

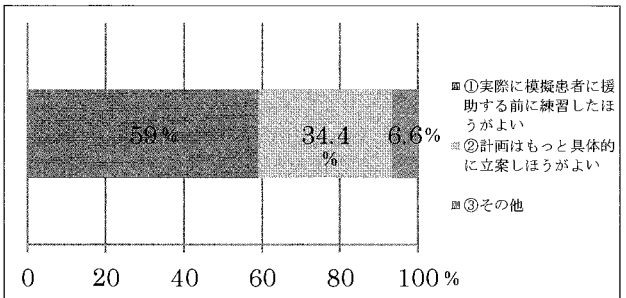

図３　援助を通して気づいたこと

（４）演習実施時の緊張感

30名（52.6%）の学生が「とても緊張した」と回答した。また、「緊張したがそれほどもない」と回答した学生は、19名（33.4%）、その他と回答した学生は、８名（14%）であった。

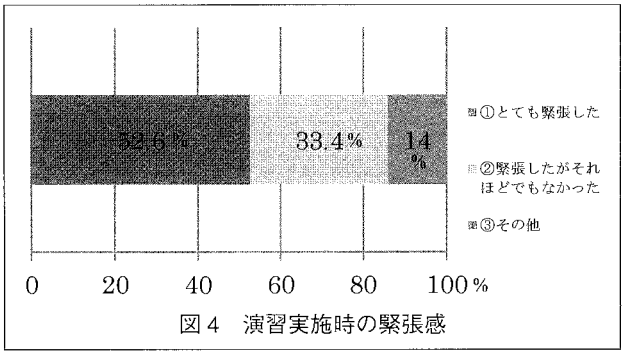

図4　演習実施時の緊張感

（5）演習時緊張した理由

24名（41.3%）の学生が、模擬患者を活用した演習は「初めてのことだった」と回答した。また、15名（25.8%）の学生が、模擬患者に援助を実施することに対して「自信がなかった」と回答し、3名（5.17%）の学生は、「じっと見られていたため」と回答している。

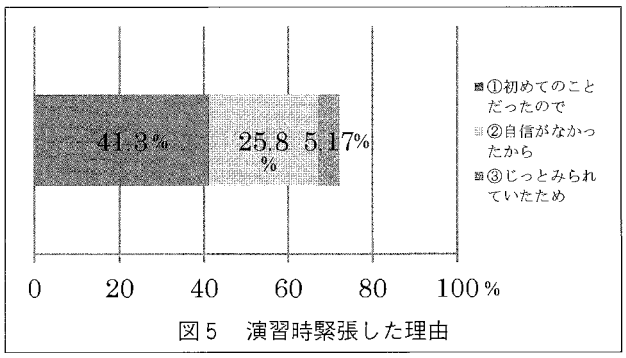

図5　演習時緊張した理由

（6）演習の必要性

このような演習があった方がよいか、演習の必要性について、48名（82.8%）の学生が「思う」と回答している。そして、「どちらでもよい」と回答した学生は、9名（15.5%）、「思わない」と回答した学生は、1名（1.7%）であった。

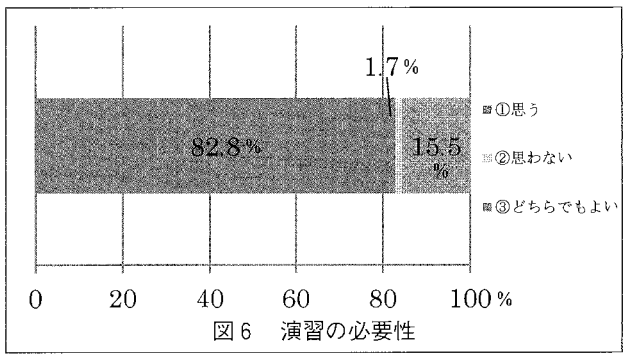

図6　演習の必要性

2．模擬患者演習後の意見・感想

12名の模擬患者が、演習の振り返りで学生たちの『事前の練習不足』や実施中の『学生の緊張感』について述べていた。また、「看護師役の学生に任せきりにみえる」との感想があった一方、「みんなで考え患者に援助したいという気持ちが伝わってきた」や「説明してくれた内容がわかりやすかった」との感想もあった。「患者と一緒に取り組むという気持ちで臨んでほしい」との意見もあった。

表5　模擬患者演習後の意見・感想

・事前の練習が必要・練習不足（8）
・学生の緊張感がとてもよく伝わった（6）
・患者と一緒に取り組むという気持ちで臨んでほしい（4）
・看護者役の学生に任せきりにみえる（3）
・声が小さく何をいわれているかわからなかった（2）
・みんなで考え患者に援助したいという気持ちが伝わってきた（2）
・説明してくれた内容がわかりやすかった（1）
・高齢者とコミュニケーションしたことがないのではないか。(1)

V　考察

演習終了後のアンケート結果及び実施後の模擬患者との振り返りから、技術を練習する必要性や、患者へどのように説明すると良いかと気づくことができ、模擬患者を活用した効果はあったと考えられる。

アンケート項目のコミュニケーションに関して、勉強になったと回答している理由として、「説明時どのように話すとよいかわかった」をあげている。患者への説明の仕方や話し方については、全領域の教員が講義で繰り返し説明している。しかし、2年生は模擬患者に実施したことで、模擬患者から指摘されて納得理解している。このことは座学ではなく、体験学習をもっと多くすることで学習効果が高くなることを示唆していると言える。

演習では緊張感を感じていたが、これは『学生ではなく、模擬患者に援助することでよりリアルな感じだった』という自由記載の内容と考え合わせると、学生を患者役とする演習と異なり、模擬患者を活用することは学生間の「なあなあ感」やメンバーや教員に対する依存感が、一生懸命に取り組む積極性と緊張感に変わり、臨場感のある演習となったと考えられる。また、『援助を受けてこの時にこう思った、このようにしてほしかったと気づけた』、『気づけないことも患者目線で考えることが出来た』との記載からも、患者のことを考えようとする気もちを育てつつある姿が垣間見られ、模擬患者を活用する効果は高いと考える。

今回の演習をとおして個々の学生が、看護者役として或いは観察者として模擬患者に接しながら、自ら援助技術の練習をする必要性を感じている。

『看護師役の学生に任せきりにみえる』と模擬患者から指摘されたことや、アンケートの『計画について改善点を事前に教えてほしい』との要望があったことを考え

ると、演習はグループではなく、学生一人ひとりが実施できるようにする必要性があることを改めて認識し、もっと援助の「実施評価」の部分に時間を多く配分した授業とする必要を感じている。

また、事前に看護計画に関して追加修正の指導を行っているにも関わらず、『計画について改善点を事前に教えてほしい』との要望があった。このことから、グループメンバーに任せたままでメンバーとしては機能していない学生の姿が見えてくる。全学生がもれなく学ぶためにも、個々で取り組み、体験しながら学習できる方法を工夫していく必要がある。また、アンケートに見る学生の反応で、「コミュニケーションの勉強となったか」の問いに対して、1名（1.7%）が「勉強にならなかった」と回答し、「演習の必要性」に対しては、9名（15.5%）が「どちらでもよい」と回答している。今後、模擬患者による演習の効果を高めるには、この理由を分析し、改善する必要もある。

模擬患者から「説明してくれた内容がわかりやすかった」との感想をある反面、「高齢者とコミュニケーションをしたことがないのではないか」との意見もあった。学生個々により持っている能力は異なる。その個々の能力を見抜きながら、看護師として育てることが教員に課せられている。

看護教育は学内での講義だけでなく臨地での実習指導にも膨大な時間がとられ、多くの学生を教員だけで教育することは困難となっていると感じる。また、高齢者数は増加し、入院患者のほとんどが高齢者であるにも関わらず、学内では学生を患者役として技術の練習をしている。青年期の人々で練習した技術は、そのままでは高齢者に実施出来ないこともある。

看護教育には、明治時代の看護婦養成の始まりから医師をはじめ、最近では他職種の人々が関わっている。今後は、医療側にたつ人々だけでなく、患者側にたつ人々の協力も得て育てることが必要となってきていると考える。

参考文献

1）福間美紀　ほか：看護基礎教育における模擬患者を導入した看護過程の教育効果とその課題、島根大学医学部紀要、第29巻、P15-21,（2006）

2）佐藤久美子　ほか：「看護過程」における模擬患者参加型授業の学習者評価からの検討、SCU Journal of Desing &Nursing Vol.3, No.1, P69-74, (2009)

3）井上京子　ほか：当大学看護学科における模擬患者参加型授業の実際、Yamagata Journal of Health Sciences, Vol.15, P33-43, (2012)

4）小竹久実子：Simulated Patient 演習導入の意義と在宅看護学への応用展開、順天堂大学医療看護学部医療看護研究 第9巻2号、P51-57,（2013）

著者への連絡先：石川智子　山田ノリ子　〒238-8580 神奈川県横須賀市稲岡町82番地　神奈川歯科大学短期大学部看護学科

TEL：046-822-8781　FAX：046-822-8787

E-mail：t.ishikawa@kdu.ac.jp

yamada@kdu.ac.jp